信州紬の歩み

上田紬から紐解く紬の歴史

尾崎 行也

紬は信濃の女の手そのもの
　あの手でなければ創り出せないもの
こう思いこんで紬を着る
　その時　わたしは落ちつき　安らぐ
そして紬の都　上田を想う
　この手ざわりは　浅間を恋う心をよみがえらせ
千曲の流れに耳をすませる
　上田紬はふるさとそのものである

丸岡 秀子

「つむぐ」ということ

布を作るのには、まず原料となる糸を準備しなければならない。糸は、その元となる繊維の種類によって、作り方が異なる。

麻を糸にするには、麻の繊維の幅広い部分（根元）に縦の小さな裂け目を作り、次の麻の繊維の細い部分（先端）をその中に差し込んで撚る。これを「績む」という。「麻を績む」から「麻績」という言葉ができた。原始繊維として知られている科（科の木の樹皮）も、同じ方法で糸にする。

絹糸は、蚕が作った繭を煮て、その繭数個ないし十数個から生糸を取り出すが、これを「引く」という。生糸は硬い（成分はセリシン）ので精練して軟らかな絹糸にする。

角真綿取り

袋真綿取り

木綿の糸は、棉花から種子を抜いて繰綿とし、それを筒状にした綿筒（あめ、篠巻ともいう）から取るが、これを「紡ぐ」という。羊毛も糸にすることを紡ぐという。

信州紬は絹織物の一種である。それにもかかわらず「つむぎ」というのは、その原料糸の取り方が「つむぐ」だからである。それは繭から直接糸を引くのではなく、いったん真綿を作り、その真綿を「つむぎ」、真綿のつむぎ糸にしてそれで織物を作る。なぜそのような手間のかかることをするのか。それは原料とする繭が、糸の引けない状態になってしまっているためである。繭の糸は本来一本である。しかし繭が傷んで糸が途中で切れたり、二本の糸が絡んでしまっていて、生糸が引けない状態のものがある。前者には、さまざまなくず繭（不良繭）と出殻繭がある。出殻繭は、繭の中の蛹が蛾（成虫）になり、繭を溶かして穴をあけ外に出てきたあとの繭のことをいう。この蚕蛾は卵を生むので、蚕卵（これを蚕種、さんたね、さんしゅという）を作るのにはぜひ必要なことになる。蚕種屋（蚕卵製造者）が蚕種を作ると、多量の出殻繭が出ることになる。後者は、玉繭または同功繭といい、二頭の蚕が一緒になって作った繭のことである。

以上のような生糸の引けない繭は、よく煮て柔らかくし（セリシンを落とす）、繭層を広げて、中の蛹を取り除き、四角の木枠に掛けたり、手のひらに掛けて真綿にする。前者を角真綿、後者を袋真綿という。すなわち、本来糸にならない繭を、真綿にしてそこから紬糸を取る。くず繭からの再生糸ということになる。それが紬織物の原料なのである。

信州紬と上田紬

信州紬は、信州（長野県）で作られる紬のことで、上田紬はその信州の一地域、上田で作られた紬のことである。

養蚕が行われた所では、どこでも屑繭ができる。殊に蚕卵製造（蚕種造り）が行われれば多量の出殻繭が生じる。信州はどこでも養蚕が行われ、また蚕種屋もあったから、どこでも紬の